舞蒼恋琴
ブソウレンキン
ADULT ONLY

蒼琴
舞恋

目次

表紙　イラストレーション　流一本

中扉　イラストレーション　流一本

目次　2

まいまい(舞-HiMEマンガ)　流一本　3

カレン×ブレード(コードギアスSS)　白朧　15

落書き(舞-HiMEの落書き)　流一本　21

舞衣イラスト(舞-HiMEイラスト)　くろうさぎ　25

奥付

まいつまい

by 流一本

でもさ…
みんな休みなのに
一人でよく頑張って
るよね

しょうがねぇよ
だいぶブランクが
あったからな
一日でも多く練習
しないと…

舞衣に一つでも
多くオレが勝つ
とこ見せたいんだ

ゆ…

祐一…

でも本当は毎日
でもお前とデート
したいんだけど
な…

バカ…

……

ん――

何？

今日は
オプション
は？

オプ…ああ
ミコトなら
ナオちゃんと
遊びに行った
みたい

ならいい
ん…
ゆういち…
くちゅ
ちゅる
舞衣…
あ…
ちょっと…
やだ…
祐一…
また…？

あっ…

ちょっ…
祐…いちぃ…

舞衣のちくび
汗の味がするな

やっ…

れる
れる

あっ…
んん♡

ちゅぱ

はああ…

ちゅぱん

んくぅう♡

だ…だめぇ
ちくび…
おかしくなっちゃ
うでしょ

ひく
ひく

もうとっくに
おかしくなってるよ
スゲー勃起

ほら もっとお尻 あげて

う…

うん…

プリン

ちゅぱ

はんん〜〜

や…やだぁ ゆういちぃ

そんなとこ 舌…入れちゃ…

ん

ズチュ

ズチュ

ズチュ

ビク

あっ♡

あっ♡

ビク

クポ
クポ
ゆ…祐一
そこは…
ズボボボ
はうううう
だ…だめだよ
祐一…
汚いから…
舞衣に汚い
ところなんか
ねぇよ
それにお前だって
期待してたんだろ
ち…違う
……
こんなに
腸液トロトロに
させといて
説得力ねぇよ
ネトネト
ビクビク
あ……

はぁあああんっ!!

いっ…
ひうう
おひっ
おひりぃ♡
ボチュ
ボチュ
いく
いくぅ
おひり
いぐぅ
ブルブル
ズッ
ズッ
ジャア
あっ
ブル
おうぅぅ♡
ブルル

あぁ
あぁ
♡

ぁぁぁぁぁ

ハァ
ハァ
お尻の穴がぽっかり拡いたままだ

舞衣…
こいつを…
ん…
ねちょ
んふ
んぐぐ
もぎゅ
もぎゅ
うっ
おお！
グポ
グポ
んっ
んふぅ
すげ…
また射精(で)そうだ
ビク
んん
いいお
だひてぇ
ズッ
ズッ
わたひに私
ゆういひのへーひ祐一精子
のまへてぇ♡

ビュルル
ビュブゥ
ビュー
ん…
んん
フク
フク
お…お願い
祐一ぃ
ここも…
はぁ♡
はぁ♡
おま●こもしてぇ
舞衣のおま●こ
祐一のおち●ぽで
ぢゅぼぢゅぼして
ちょうだい
ぴっ♡
ぴっ♡
ぴっ♡
ぴっ♡
ね♡
ね♡
しちゅ♡
しちゅ♡
しちゅ♡

カレン×ブレード

著者　白麟

カレンは、ゼロの部屋に向かって足を進めていた。短い通路は、あっという間に目的地までの距離を縮めてしまう。

「ゼロ？　カレンです」

ゼロの私室のドアを叩く。

（……）

返事がないので、再度ノックしてみる。やはり返事がない。軽い気持ちでドアのノブを回すと、あっさりと回ってしまった。

「あれ？　開いてる」

今まで、いついかなる時も施錠されていたゼロの私室のドアが開いている。

「ゼロ？　居るんですか？」

薄暗い部屋には人の気配は感じ取れない。

湧きあがる誘惑を抑えきれずに、机の方に回ってみる。机の上は整頓されていて、無駄な書類が広がっていることはなかった。

「やだ、何を期待したんだろ……」

ゼロの心の中の一端が見れるかも知れない。自分の中にある誘惑に膨れ上がってくる。

ゆっくりと、引き出しに手を伸ばし、音を立てずに引き出しを開いていく。

中には、書類が一枚だけだった。

ディートハルトが作った組織体制の草案だ。その上に何箇所か赤い文字が訂正されている。

ゴクッ

自分の唾を嚥下する音が体内に響く。ゆっくりと書面に目を走らせる。

香月カレン、自分の名前があ、その横には第零番隊の隊長と記されていた。

（ゼロ……）

胸の中に淡い思いが広がる。

（ゼロは私を見てくれている。ゼロは私の手で守る。守ってみせる）

素顔すら知らないゼロへの思いは、日々膨らんでいく。

「ゼロ……、ゼロぉ……」

いつの間にか躰が火照って来ていた。身を隠すように床に座り込むと、椅子に頭をもたれかからせていく。

「ゼロの……、匂いがする……」

錯覚に過ぎないかもしれないが、こうしているとゼロに包まれている気がする。

「はぁ……。ああぁ……」
カレンの指は、無意識に胸をまさぐり始める。黒の騎士団の制服の上から、豊かなバストを揉みしだいていく。昂ぶっていったために、躰はすぐに火照り始めてくる。
ゼロがいつも座ってる椅子に顔を近づけ、微かに残るゼロの匂いを嗅ぐと、頭がくらくらしてくる。
「んっ……ダメ……こんなところで……ああ、ダメなのに……ぃ」
床に跪き、椅子に舌を這わせる。騎士団服の中に手を潜らせ、かっちりと豊かなバストを包んでいたブラをずらす。期待にしこった乳首を指先でこりこりと転がすと、背中に電流が駆け抜けたように全身の筋肉が硬直した。
「乳首、こんなに硬くなってるぅ……、あっ、私、が、ゼロをま、もるから……。……ああっ、動く、お尻、勝手に動いちゃうのぉ……」
両手で左右の乳首をいじり倒すが、それだけでは火のついた躰は満足してくれない。むしろ、より深い快楽を求めて子宮を中心に熱い疼きが全身に広がってしまう。
片方の手は乳房を荒々しく揉みながら、もう一方の手を股間へと伸ばす。フアスナーを下げ、秘所を包んだショーツの中に手を忍ばせ、汗とか違う体液を吸い込んで濡れたショーツを横にずらす。
「ぬ、濡れてるぅ……私のアソコ、こんなに濡れて……」
指が軽く陰唇に触れると、粘着質な音が立つ。やや粘ついた愛液をかき分けるようにして、指を花弁の奥へと進める。ぬるりとした体液が指にまとわりつく。
「あっ……は、あぁ……あふぅ……っ」
まだ男を受け入れたことのない未開拓の秘口周辺を指の腹で引っかくようにいじる。小さな膣穴がひくひく物欲しげに震え、透明な汁がじゅくじゅくと溢れてくる。
(ゼロのオチン●ン、欲しい……)
快楽を追い求めて、乳首と秘所をいじる手が早まる。
「はああっ、ゼロっ……、犯してぇ、カレンのアソコ、ぐりぐりしてぇ!」
汗と涎で椅子が汚れていく。乳首と秘所をいじる手は加速度的に早くなっていく。刺激が欲しくて堪らなくなったカレンは肘掛けに股の間に挟みこみ、サカリのついた獣のように腰をかくかくと前後に振りたてる。
「ひいいっ! ひっ、ひいン!」
紅潮した顔には大粒の汗が浮かび、焦点のずれた瞳は妖しく濡れ光る。
「擦って、クリっ、もっといじめて! アアッ、そ、そこが感じるのっ、私、そこが弱いのぉ! あひっ、はひいいっ!」
(ダメ、もう、いくッ……私、ゼロの部屋でオナニーしてイッちゃう!)
カレンは、背もたれに手を掛けて身体を起こすと、絶頂に向けてラストスパートに入った。肘掛けを相手に騎乗位で腰を振るカレンの口から、喘ぎ声と涎が止まらなくなる。
「ゼロ、突いてッ! 私のオマ●コ、奥まで突き上げてッ!」
髪を振り乱し、豊かな乳房を揺らし、ゼロに見立てた肘掛け相手に卑猥な行為に没頭するカレン。乳首をちぎるかと思うほどにねじり、硬く勃起したクリトリスを爪でつぶすように刺激する。
「イイッ、乳首とクリ、痛いのがイイの! ヒィッ、イイ、気持ちイイっ!」
失禁したと思うほどの大量の蜜を肘掛けから垂れ流しながら、いよいよアクメが近づく。
(ああ、イク、私、ゼロの椅子相手にオナニーして、イっちゃうぅ!)
腰から下が溶けてなくなるかと思うほどの甘い痺れと狂気とも思えるほどの昂りが躰を満たしていく。
「ああっ、イクっ! アアッッ! イク……、イクっ……ゼロ、ゼロぉ……ああああっ!」

顎を天井に突き出すかのように、カレンの背中が大きく弓なりにのけ反った。汗でてらてらと濡れ光る双つの乳肉がぶるりと揺れる。

「うあああ……あっ……はぁん……」

半開きになった口から苦しげな声を吐き出しながら、カレンはゼロの椅子にもたれ掛りながら、痙攣を繰りかえし続けた。

そして、かすかに開いたドアの外に立っている人物がいた……。

突然、ドアが開く音に、カレンは現実に引き戻される。

「誰ッ？」

カレンの視線の先には、仮面とマントを身に着けた人がドアを開けて立っている姿が映る。

「え……？　ゼロ？」

仮面の人物は無言でドアの所から、カレンの方に向けて歩を進めてくる。

「ゼ……ロ、あ、あの……これは……」

カレンは突然の状況変化に戸惑い、しどろもどろに言い訳を紡ぎだそおうとしたが、言葉はうまくまとまらず。ゼロはその間も、歩調も崩さずにカレンに近づいてくる。

カレンは乱れた衣服を直すことも出来ず、ただ、両手で豊かな胸と秘所を隠すだけだった。

立ち尽くしているカレンの目の前まで歩いてくると、歩みを止める。

「ゼロ……、そ、その……」

手が無造作にカレンの秘所に伸びてくる。カレンの手をどけて、自慰の後の濡れそぼった花弁を弄り始める。

くちゅくちゅ

「ああっ、ゼロ……」

先程イッたばかりの秘所は敏感になっていた。すぐに脚に力が入らなくなり、手がゼロのマントを掴みかろうじて倒れるのを免れる。その結果として、カレンは乱れた衣服のまま、ゼロへと体を密着することになってしまう。

もたれ掛かり身体を密着させると、カレンはその違和感に気づいた。明らかに男の体ではないことに……。

「誰ッ！　ゼロじゃない！」

昂ぶった躰に無理矢理活を入れると、身体を引き離し、身構える。

ゼロは、仮面に手をかけ、ゆっくりと仮面を外す。外した仮面の下から緑の髪が広がっていく。

「あ、あなたC．C．！　いったい、何のつもり！」

C．C．はカレンの質問を無視して一歩踏み込み、カレンの唇を奪う。

突然の行動に驚き、唇をもぎ離そうとするカレンの後頭部を両手で押さえながら、強く吸い付きカレンの口内に、自らの口内にあったカプセルを移す。

その際には、たっぷりと唾液も流し込んでいく。

数秒でカレンが耐え切れなくなり、口内に入ったカプセルとC．C．の唾液を嚥下してしまう。

C．C．は飲み込んだのを確認すると、ゆっくりと唇を離す。二人の唇に銀糸が垂れる。

「な、なにを……」

カプセルを嚥下したカレンは咳き込み、C．C．に詰問する。

「軽い幻覚剤だ。私の事をゼロだと思っていればいい……」

少し離れた所で、C．C．はゆっくりと髪をまとめ、仮面を再度かぶり始める。

「ん、こんなもので……」

ゼロに変装したC．C．の姿が揺らぎ始め、次第に意識が混濁してくる。

「C．C．……、ゼロ……、C．……C．……、ゼロ……、ゼロぉ……」

カレンは、甘えるような声でゼロを呼びながら、C．C．の体を抱き寄せる。

「あ……、ゼロ」
仮面でキスが出来ないからか、カレンを仮面の表面を犬のように舐めまわす。
「ゼロ……、カレンを感じてください……」
仮面を執拗に舐めまわしながらカレンが囁く。舌を仮面の外周部分をなぞるように這わせ、C．C．の手を自らの胸に導く。
先ほどまでの自慰の余熱が残っていて、すぐに昂り、乳首が勃起し始める。
「はふ……あ、……あん、ンッ！　ゼロ……、わ、私のこと、無茶苦茶……にして……ください……。ずっとずっとこうしてもらいたかった。……ゼロに気持ちいいことしてもらいたかった……」
軽く指を動かしただけで、カレンが声をあげる。C．C．は空いている方の手をカレンの腰に回すと、そのまま、身体を入れ替えた。
結局、体勢はC．C．がカレンにのしかかる格好になる。
ボリュームのあるカレンの胸をC．C．が両手で揉みしだきはじめる。手のひらからこぼれるようなサイズで、表面は柔らかいのに、力を押し戻す弾力も兼ね備えていた。
「んん、んぅ……ん……」
カレンは仮面を抱きかかえるように両手を回し、脚もC．C．の腰に絡めるように切なげにくねっている。
「ふふ……、もう乳首が立っているな……」
C．C．の手のひらにはこりこりと感じられる乳首が、はっきりとわかるほどに硬くなってきた。C．C．の仮面越しに、頬を昂揚させ、切なげに喘ぎを漏らすカレンの顔があった。
「ふうん、随分とエロい顔だな。そんなにゼロに抱かれたかったのか？」
「ゼロ、ゼロ……。わ、私が守るから。あんな白兜なんて……」
C．C．の手は乳房だけでなく脇腹を経て、ショーツに守られた秘所に向かっていた。
「濡れてるな。もうぐちょぐちょだ……」
「あ、やだ、あ、あああ……、ゼロ、き、気持ちいいよぉ……」
そっと指先が触れただけでわかるほどに、ショーツに底はぐっしょりと濡れていた。先ほどの自慰だけではなく、まだ新しい蜜が溢れてきている。
C．C．の指が直接、秘芯を弄るために、ショーツに中に手を侵入させる。
「ゼロぉ……、ンン、ああ、ダメ……あむぅ……ンン！　……ああっ！　くふぅん！」
指が、蜜に溢れた女陰に触れると、カレンは鼻にかかった声をあげて身を捩じらせた。発情しきった女陰は淫靡に濡れそぼっている。
「随分と敏感な反応だな……。そんなにゼロに抱かれてるのが嬉しいのか？」
「うん、うん、う、嬉しい……、も、……っと、ぐちゃぐちゃにして……、あぁん！　指……、ゼロ、激しっ……あんん！」
C．C．は膣孔ではなく、周辺の柔らかな花弁を責め始めた。指の腹を使い、手首を小刻みに左右に動かしてカレンの肉唇を愛撫する。まだ未発達な肉ビラが交互に捲くられるたびに、カレンの濡れた唇から甘い声が洩れる。
「あっ、ああっ！　はあん、あっ、ああん！」
カレンの尻が無意識に床から浮かび上がる。瞳が悦びに潤む。膣口からはまたさらに大量の蜜が溢れ、手袋と秘所をびしょびしょに濡らした。
「やっ、イイッ！　……ダメ、ゼロ、私、私……っ」
カレンから切羽つまった嬌声があがる。C．C．の手にほぐれた花弁が指にまとわりつく感触が伝わり、さらに愛撫が激しさ増していく。
「イッちゃう……ダメ、このままじゃ……はあぁっあ、イクっ、イクっうう！……ひっ、はあああぁッ！」
小さなブリッジをするように腰を低く浮かした格好のまま、カレンが甲高い声とともに果てる。ヒクン、ヒクンと可憐な花びらが震えるのが指先に伝わってくる。

「もう、イッたのか、イヤらしい牝猫だな……」
「はいぃ……、カレン……は、ゼロのぉ……手だけでイカされる……、イヤらしいぃ……牝猫で……す」
ぼうっと朱色に染まった目元と額に浮かんだ汗が艶やかに輝いている。
「ゼロぉ……、ゼロのオチン●ンが欲しいです。イヤらしい牝猫のカレンをゼロの抉ってぐちゃぐちゃにしてください」
「安心しろ。たっぷり抉ってやるさ」
C．C．は部屋の脇の棚から双頭ディルドゥを取り出した。自らの秘所にあてがい挿入していく。
シリコン樹脂のペニスとはまた違う感触が、ラビアを巻き込みながら膣の襞を押し退けて入っていく。しっかり奥まで挿入すると、C．C．の女陰に雄々しいペニスが生えた。
用意しておいたローションを潤滑油代わりに、ディルドゥに塗りつけていく。
C．C．がディルドゥを支えながらカレンに覆い被さる。先端で割れ目を撫で、挿入準備を整える。
「カレン、初めてが私でいいのか？」
「は、はい。ゼロのがいいんです！　ずっと……、ずっと犯してもらいたかったんです！」
昂揚した頬をさらに紅く染めて哭き叫ぶ。幻覚剤の効果でC．C．がゼロにしか見えていない為の哀願であった。
「ここまで言われると、少々罪悪感があるが……、目の前の美味しそうな果実を見逃すのもな……」
C．C．はディルドゥをカレンの膣口にあてがう。カレンの躰は両手足をC．C．の背中と腰に絡ませて懇願してくる。
C．C．のディルドゥの先端が、カレンの未発達な膣口を強引に押し開きはじめる。
「ん……ん、んん……っ」
カレンの両腕に力がこもる。戦闘訓練で鍛えられて二の腕には、ほっそりとして見えるが、しなやかな筋肉に覆われている。
C．C．はゆっくりと、しかし着実に腰を進めていく。信じられないほど小さく狭い処女穴が、無機質なディルドゥで押し広げられていき、ある程度まで進むと、別の抵抗が待ち構えていた。
C．C．は一息にディルドゥの先で処女膜と思しき抵抗を引き裂いた。
「あぐっ！　んぐっ、ふぐうううぅっ！」
カレンが破瓜の激痛にくぐもった悲鳴をあげる。無意識にC．C．の背中に爪を立て必死に痛みを堪えている。無機質なディルドゥが秘道を開拓していく。
「ああ、……ゼ……ロ、入った？」
いつもの張り詰めたカレンではなく、病弱を装っているカレンでもなく、一人の女の顔をしたカレンが、弱々しく尋ねてくる。
「全部入ったぞ。頑張ったなカレン……」
「う、嬉しい。お腹の奥に、ゼロの熱いの、感じる。ああ、すごい……、私のお腹、ゼロに串刺しにされてる……」
その結合部からは純潔の証である赤い筋が見えた。そして、カレンの両脚ががっちりとC．C．の下半身を押さえ込む。
「ゼロ……。私のなか膣内はどう？　気持ち……いい？」
「ああ……、最高だよ。カレン」
「ああ、う……、れしいです。ゼロ……、最後まで……。私、どんなに痛くても耐えるから」
激痛の為か、女になった喜びの為かわからない涙を溜めながら、健気に懇願してくる。
その愛らしい懇願は女のC．C．にすら欲望の火を灯した。腰が激しく前後に動き始める。しかし、膣道が狭く襞粘膜ががっちりとディルドゥを絡んでい

るため、ほんの数センチ前後させるだけでもカレンは苦痛にうめく。
C．C．は、前後ではなく、子宮の奥を先端でつつくように動き始める。
「ひゃぁうう！　な、なに、なんなの？　ゼロのが……、奥にあたってるぅ！」
C．C．はその動きを少し続けて、また前後に激しく動き、再度、奥に突付くように、動きをローテーションさせた。
「やぁん、へ、ヘンな感じ。お腹が、ゼロに触られてるぅ、みた……い。ああ……、ま、また……ああっ！」
「カレン、いいぞ、お前の中、すごくイイ！」
「ああ、ゼロ……、ほ、本当？　本当にいいの？」
激しく攻めれば攻めるほど、C．C．の中に入っているもう片方のディルドゥに刺激が伝わってくる。
実際にC．C．の秘所は、もう大洪水みたく、愛液が溢れてきている。
ディルデゥからの刺激と、カレンを攻めるという精神的な昂ぶりで、もう既に何回かの小さな絶頂を迎えていた。
「ゼロ、もっと、激しく……。もっとカレンを無茶苦茶にしてください……」
「ああ、わかった」
C．C．は自らも絶頂が近いのがわかっているから、より激しく動き始める。
「ゼロのが、硬いのが……、ごりごりってしてる……はぁん、んぁ、あん、んむっ！」
カレンの腰もより深く求めようと、前後に動き始めてる。
「やぁあ、ヘンなのぉ、お腹の奥、ゼロに苛められてヘンになってる……あっ、ああ！」
「う、カレン、も、もう……」
「ゼロ、私も、もう、イクっ、イクッーーう！」
無意識に、カレンは最後により深くにもとめるために、絡めた両脚に力をこめる。
「ひぅっッ！　ひぃっ　ひぃいいっ！」
二人は同時にアクメを向かえた。
「ん……、ここは……」
カレンの目がうっすらと開く。記憶が定かではないが、医務室のようだ。
「気が付いたか？」
ベッドの傍らには、C．C．が座っていた。
「私は……。……あっ！」
「思い出したか。お前は、私に処女を抉られて、泣き叫んで失神したんだ」
カレンはC．C．に掴みかかろうとしたが、体が自由に動かなかった。
「動かないほうがいいぞ」
「うるさい！　あんなことをしておいて……！」
「記憶はしっかりしているようだな。私を憎んでもらっても構わん……。だが、今は寝ていろ……」
カレンは全身の力を振り絞って、C．C．の手を引っ張り、ベッドに引きずり込む。
「姦られたら姦りかえすだけよ！」
C．C．を組み敷いて、カレンはC．C．に覆いかぶさり、唇を重ねる。カレンは積極的に舌をC．C．の口腔内に侵入させる。じっくり味わってからゆっくりと唇が離れる。その時のカレンの表情には、憎しみではなく、欲情に彩られていた。
再度、C．C．より唇を寄せてくる。そのまま二人の躰が睦み合っていく。

FIN

ナ…ナオ
これで本当に
大人の女に
なれるのか？
大丈夫！
全部私に
任せなさい♡

だ…だめだぁ
ナオ
もう入らないぞ！

ナオ…
ったく
ミコトったら

じゅんしょ〜
川ルカちゃん

あとがき代りのスタッフの日常つーか、グチ

くろうさぎ「LeLe☆ぱっぱ11　舞蒼恋琴」お買い上げいただいた皆様、ありがとうございます。
さてさて、今回は新しい試みと申しましょうか、Leaf以外の題材で取り組んでみました。
流一本も色々描きたいみたいだからね。
ただまだ原稿の仕上がり状態に多々問題はありますが(汗)
本人も気持ちは色々描きたいみたいだけど、現実は全く追いついていません。
それってどうよ？

白鵬　どうも、ジオン少佐の白鵬です。連邦は曹長ですが。

くろうさぎ なにも知らんように自己紹介すんな！　しかも戦場の絆かよ！
サークルカットを描いた流一本が、何描いたか忘れているのは問題あると思います。
君もサークルカット、コードギアスのカレンだと思ってるし。
それってどうよ？

白鵬　全くびっくりだよ。うちのホームページ見て初めて知ったからな！
正に衝撃のアルベルト(事実)!!!

くろうさぎ 僕はまだ観てないのでコードギアスの内容はわかりません。

白鵬　くろうさぎもちゃんと見れ。ギアス、なのは、春日丘とか

くろうさぎ なにか、一つ違うぞ。超局地的なボケはいいから。正月休みあたり時間作って観てみようかな～。(遠い目)※注1

白鵬　安心しろ。その頃にはもう二期が始まっているぞ。

くろうさぎ なのはも第二期だったな。

白鵬　なのははもうすぐ三期が終了するぞ。
話は変わりますが、今回から新たな試みということでサブタイトルが入りました。つーか、表紙にデカデカと自己主張してますが…。

くろうさぎ「LeLe☆ぱっぱ」というのは続いてます。大人の事情で。しかし、誰だ、こんなサブタイ考えたのは…。

白鵬　はーい。「一閃炸裂」も捨てがたかったんだが…。

くろうさぎ バカだろ君は…。

8月某日　秘密基地にて
銀河の歴史がまた1ページ

※注1 遠い目は「ハ●テのごとく！」10巻、80ページ、6コマ目を参照

奥付

発行　リーフパーティー
発行日　2007/8/19
発行人　くろうさぎ

ホームページアドレス
http://www.ob.aitai.ne.jp/~carmin60/

印刷所　大陽出版様

LeLeぱつぱ
DOUBLE ONE 11